

(国分市上井平梶)

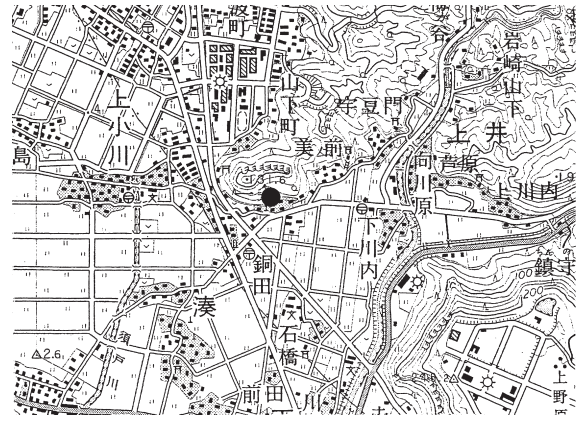
位置と環境

遺跡の所在する国分市上井平梶は、海岸より2.15 km、市役所の東南2.2kmの地点にある。国分平野の東辺に突き出した低い丘陵の先端に近く、その東斜面の麓に作られた貝塚である。南九州で、初期に出現したもので、数個のブロック状に形成されている。遺跡のある丘陵は標高135.57mで、貝塚はその東麓、標高20m、水田面よりの比高約15mの台地の末端に形成されている。発見者は国分自衛隊の教官・別府司である。この遺跡特有の新発見の土器は、1953年に知覧町石坂上遺跡で一片、1969年に宮之城^{みやのじょう}町^{とら}虎^い居^{ぼたて}甫立遺跡で一片発見した注目の土器であった。

調査の経緯

昭和46年6月17日～7月3日、同8月12日～17日の二次に渡って、鹿大学生と研究者によって発掘調査を行った。

遺跡の台地は2段に開墾されており、上段は広く下段は幅14mと狭く、上段との段差は1.5mで、境目には巨岩が露出し、この下段の畑が遺跡地で、縁辺は急崖となって山麓を形成している。発掘は、段落ちの部分の起点として、南北方向に幅2m長さ6mのトレンチ2本を平行して設定し、西をAトレンチ、東をBトレンチ、それぞれ2メートル角に区画して北から、1・2・3区とした。地層は、開墾によってアカホヤ層まで削り取られており、両トレン



第1図 平梶貝塚の位置

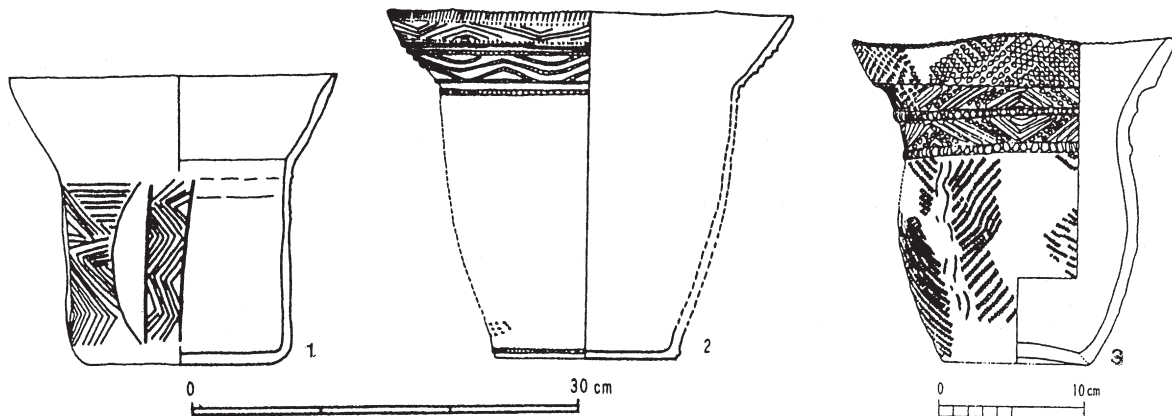
チの1区は5層に区分されるが、2区・3区では更に上部を削り取られているために、1区の1・2層に該当する部分、或いは3・4層に該当する部分まで失っている。この関係を考慮して、本来の遺物の属していた地層を確定して、記述した。

遺跡と遺物

層位について具体的にのべると、両トレンチの1区と2区との境には、開墾による1mの段差がある。これは上部は開墾によって削り取られたのである。Aトレンチ1区には、6層の堆積があり、第1層は褐色層、第2層は黄褐色層、第3層は黒褐色層、第4層は茶褐色層、第5層は黒色パミス混じり層、第6層は紅褐色粘質層で無遺物層である。A2区・A3区は、第3層以下を残している。

Bトレンチでも、B2区・B3区は3層以下を残すだけである。

貝層は、A1区内に3か所、4層から5層へかけ



第2図 1, 平梶1式(平梶) 2, 平梶式(平梶) 3, 平梶式(石峰)

てブロック状に堆積し、A 2 区で3か所、B 2 区で2か所、3 区で1か所の堆積があり、規模は80cm×30cm深さ40cm～30cm×30cm深さ50cmのもので、穴を掘り込んで貝や獣骨を投棄したもので、貝はハマグリが主体であった。

新発見の土器

石坂遺跡で発見して以来、18年目でその本体を発見した。地名をとって「平椀式」と名付けた。島津家の姫お平様が幽閉された地として、この地名が生まれた。山麓に墓所がある。

器形は胴部がやや張って、頸部が締まり、口縁部は外反し、底部は平底で、波状口縁である。口縁部は肥厚し、口唇部に刻み目を施す。口縁部外面の文様は連点・凹線による羽状文・山形文・波状文、またはその組み合わせ文様を施し、その間に刻み目凸帯を巡らす。胴部には結節縄文を施している。この施文原体は、左撚りの繊維を2条合わせて右撚りし、この右撚りの紐を2条合わせて左撚りし、途中で片方の紐で他の紐を絡めて節を作り、節以後も撚りを加える。この原体を縦に回転押捺する。102・105・106の土器がこの例である。同様の操作で作った右撚りの原体で施文したのが103・104の土器である。

結束縄文は、左撚りと右撚りの紐を絡めて、それぞれ節を作り、後、撚りを施す。この原体では中の節の痕を境に左右に傾斜した縄文が印される。

106の土器のように節の部分だけの回転押捺文のものもある。

平椀 I 式土器

A トレンチ 2 区 3 層下部 (A 1 区 5 層該当) から一括出土した完形土器である。器形は円筒形の胴部に外反する口縁部が付く平底の土器で、胴部だけに弧線と直線に囲れた枠内に、鋸歯状沈線文を充填したものである。一例のみで、類品がない。下層出土で、平椀式と同時に発生している。

このほかに吉田式・前平式・塞ノ神式・変形撚糸文・石坂系・連点文・押型文・壺形土器が出土している。

各土器の発生から終末までの年代前にあげた土器の主なものについて、層序によって発生と終末の時期を、出土した層の数字で現すと次のようになる。

吉田式 (5・4・3・2)、前平式 (5・4・3・2)、平椀式 (5・4・3・2) 塞ノ神 Aa 式 (5・4・3・2)、塞ノ神 Ab 式 (5・4・3・2)、塞ノ神 Bc 式 (4・3・2)、塞ノ神 Bd 式 (4・3・2)、平椀 I 式 (5・3)

平椀貝塚は包含層に攪乱の痕が無いので、吉田式・前平式・平椀式・塞ノ神 Aa 式・塞ノ神 Bb 式は、第5層の時期に出現して、第4層・第3層と続き、第2層の時期に終末を迎える。次に塞ノ神 Bc 式・塞ノ神 Bd 式が一時期遅れて、第4層の時期に現れ、第3層の時期を経て、第2層の時期に終末を迎える。平椀 I 式は吉田式・前平式などと同時に出現したが、後続がなく、一時期で終わっている。従来、型式=年代とする考え方が行われてきたが、本遺跡の実態でも分かるように、複数の型式が、固有の期間継続して行われるのが真実の姿である事がわかる。

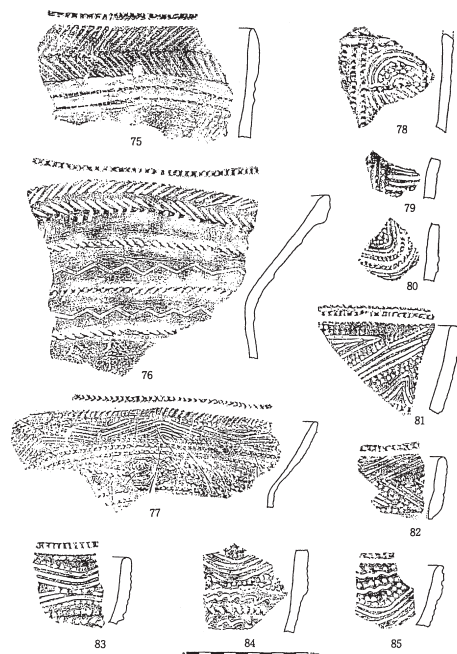
資料の所在

出土遺物は、河口貞徳宅に保管されている。

参考文献

河口貞徳1992「平椀貝塚」『鹿児島考古』26

(河口貞徳)



第3図 平椀貝塚出土の平椀式土器